守屋毅さんとシーボルト

熊倉 功夫（くまくら いさお）

プロフィール
1943年東京都生まれ。東京教育大学卒業。筑波大学教授、当館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任。現職はMIHO MUSEUM館長、当館名誉教授。2013年、中日文化賞を受賞。著書は『日本料理の歴史』（吉川弘文館）、『熊倉功夫著作集』全7巻（思文閣出版、刊行中）など。

民博の特別展はいつも異文化交流をテーマとしているが、その中に直接であれ間接であれ「日本」という視点が常に意識されてきた。これが日本の文物を扱う展示ということになれば、外から見た日本理解が、大きなテーマとなろう。その意味で私にとって忘れられないのは、一九九〇年に守屋毅（もりやたけし）さんが企画し実現した「海を渡った明治の民具　モース・コレクション」展である。

守屋さんは大森貝塚発見者であるお雇い外国人モースからはじまり、日本文化の観察者としてのモース、さらにモースが持ち帰ったぼう大な日本資料の全体像を明らかにした上で、厳選されたモース・コレクションを日本に里帰りさせた。この間、約一〇年の歳月が費やされている。守屋さんが心血をそそいだこの展覧会は、その後の、日本資料里帰り展の一つの規範になったように思う。

守屋さんはこの展覧会にすべてを燃やし尽くしたかのように、その終了と同時に末期癌（がん）の宣告を受け、わずか五〇日余りの闘病の後、翌一九九一年二月四日に四七歳の若さで没した。

当時筑波大学にいた私は病院で何度か守屋さんの話をきく機会があった。その中で、後に私自身に深く関係する会話があった。それは「次はシーボルトをやりたい」の一言だった。

私は守屋さんがなくなったあと、そのポストを埋めるべく民博に着任した。その二年後、突然、ボン大学教授ヨーゼフ・クライナー先生から民博での「シーボルト展」の指名を受けた。これは天上にいる守屋さんの意志に違いないと感じた。一九九六年がシーボルトの誕生二〇〇年にあたるので、これを機に、シーボルト・コレクションはもちろん、その息子ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションも加えて、父子が集めた日本資料の総合的な研究と里帰り展を開催しようという企画である。

特別展「シーボルト父子のみた日本」の開会式に私は特別な思いで一本のネクタイを着用した。それは守屋さんがなくなったその年の秋に、シーボルト調査に行く予定で買っておいたネクタイで、没後に奥様の正子さんから頂戴したものであった。

シーボルト・コレクションの研究は進み、昨年その後の成果が展観された。このたびのシーボルト展には新資料も展示され、大いに注目される。モースやシーボルトが、何を日本の中に発見しようとしたのか、という異文化交流の視点は、今後も、在外日本資料の研究と展示にきっと生かされることと期待している。

月刊 みんぱく

8月号目次

1 エッセイ　千字文
守屋毅さんとシーボルト
熊倉 功夫

特集　シーボルトの日本博物館

2 「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」によせて
園田 直子

4 観察された自然と文化のかたち
野林 厚志

6 シーボルトが手に入れた日本の地理情報
青山 宏夫

8 父と子が集めたアイヌコレクション
佐々木 史郎

10 ○○してみました世界のフィールド
タイ王国の展示を秋田へ
平井 京之介

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
北尾重政・政美の描いた「白沢の図」
佐々木 聡

16 新世紀ミュージアム
良渚博物館
韓 敏

18 手芸考
震災と手芸とコミュニティと
塩本 美紀

20 ながなんぢゃ
それも言語学者の仕事なの?
早稲田 みか

21 次号予告・編集後記